とある店の話

七つ夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある店の話

【Ｎコード】
Ｎ０７６８Ｘ

【作者名】
七つ夜

【あらすじ】
とあるアクアプラントの店で働く店員と、その他の生物がだらだらと話すだけ。
鈍感な青年に素直になれない少女。
それを見守る店長と、そしてカメ。
なーんの面白みもない文章が、今ここに。
哲学系ほんわかストーリー。

とある店の話（前書き）

すれ違いに行き違い。
この世はとにかく住みにくい。

とある店の話

「ちわーっす」
田中は、バイト先であるアクアプラントの店に入ってきた先輩の恭介に挨拶した。
あと、恭介に一つ訊かなければならないことがあったので訊いておく。
「このカメ死んじゃってたんですけど……恭介さん。どうしますか」
二匹セットで売っていたカメのうち、一匹が死んでしまっていたのだ。
今日の朝一番……といっても少し前なのだが、餌をやるときに気づいたのだった。
恭介はそれを聞き、ふーむ、と顎に手を当てた。
いつもと比べて暗いなーって思ってたが……。
コイツの元気が無かったのはコレの所為か……。
二秒ほどして、恭介は答えた。
「おう、そうだな……確か、結構長生きしてるカメがいたな。ほら、相方が先に死んじまってたヤツ」
ああ、と田中は思い当たったので答えた。
三年ほど前に同じくセットで売られていたカメがいたのだが、今回のように一匹だけ死んでしまったカメがいた。恭介が言っているのは、その片割れのことだろう。店長の「病気を貰っていると困る。だけど捨てるのも可哀想だ」との意見で店の隅で売られていたカメ。
「カメ夫ッスね」
ちなみに名づけたのは田中だ。
「そうそう、カメ夫だよ。で、今回生き残ってたのは？」
恭介が尋ねる。
「生き残ってたのは……カメ吉ッスね」

田中が少し寂しげに答える。
恭介は、少しは可愛げのある後輩だな、なんて思いながらポン、と軽く田中の肩を叩く。
そしてこう続けた。
「まあカメ吉はさっさとカメ夫の所に移してやれよ。相方が死んで寂しがってるかもしれないだろ。
……まあ、飯でも食いにいくか。朝飯食ってないからさ、俺。一緒に行こうぜ」
傷心の後輩のために、少しぐらいなら何か奢ってやろう。
そう思って恭介は、いつものようにレジへと手を伸ばし――。
「ダメですよ、勝手に店のお金使っちゃあ」
――という田中の手によってそれは阻止された。
「朝ごはんなら、そこに作ってあります。どうぞお食べになってください」
田中がビシッと指差した先には、おにぎりが三つ。
「おう。サンキューな、後輩。いい奥さんになれるぜ、お前は」
そう言い残して、とっとっと、と指差した先へ消えてゆく恭介。
少し上ずった声で、「じょ、冗談言わないでください」と言いながらカメ吉の水槽を持って店の端のほうへと向かっていく田中。
一方からはムシャムシャと、一方からはポチャン、という音が聞こえた。
きっとお互いに、それは聞こえていない。
「やれやれ、今日も擦れ違ってるねえ……ホント、上手い具合に」
店の外で一部始終を見ていた店長が溜息を吐いていたのも、きっと誰にも聞こえていないだろう。
「こんなに小さな世界なのに、なんでこうも上手くいかないのかねえ」

とある店の話（後書き）

第三者的な目線で文章を書こうと思って頑張ってみたんですが……
上手くいかないモノですね、やっぱり。

読んでくれてありがとうございました。

とある店の、とある水槽の中の話（前書き）

小さな世界。
そこからさらに、小さな世界。
流されて、流されて。
僕らは何処へ行くんだろう？

とある店の、とある水槽の中の話

「なあ、カメ夫さん」
「なんだい、カメ吉君」
プカプカと心地よい水の流れに身を任せながらカメ夫は語る。
「なんで、この水槽の中に、私たちはいるのかなあ」
小綺麗な部屋の、たくさんある水槽の中の一つ。
そこにカメ夫とカメ吉はいた。
「気づいたらここにいて、気づいたらプカプカと流されていた。……なんでなんだろうなあ」
カメ吉は、思ったことを流されたまま、流れるままに口にした。
「ついさっき、ここに放り投げられてやっと今、不思議に思ったんだ。……本当に、なんでなんだろうなあ」
砂利の上でゆらゆらと揺れながら、カメ夫は流れで答えた。
「それはきっと、私たちにはどうにもできないことなんだよ。カメ吉君、流されたままでいいんじゃないかい」
カメ夫は、そういうカメだった。
「大体この名前さえ、人間から流れでもらったものじゃないか。今更だよ、そう思わないかい？」
カメ吉は思う。そう、きっと一生僕らは流されて生きてゆくのだと。
知らぬ間に大きな渦に巻き込まれて、知らぬ間に消えてゆくのだと。
「……でもね、カメ夫さん」
「なんだい、カメ吉君」
お互いに水の流れに身を任せながら言葉を交し合う。
一方は上に。
一方は下に。
「きっと、この流れに少しだけ逆らってみれば何か変わるかもし

れないよ。こんな小さな世界だけど、きっと何かが変わると思うんだ」
カメ吉は、そう言ってまた流されてゆく。今度はゆっくりと下へ落ちてゆく。
「そら見たことか、カメ吉君。君は、逆らえなかったじゃないか。こんな止まった世界にさえ逆らえないんだよ、僕らは」
カメ夫は言った。少し後ろに落ちてくるカメ吉に向かって。
ほんの三年ほど前に、同じ場所で交わした言葉を思い出しながら。
ゆらゆらと砂利の上で揺れながら。

◇◆◇

「――って話を思いついたんですけど、恭介さんはどう思います？」
「知るかよ……ってか真面目に店番しとけ！」

とある店の、とある水槽の中の話（後書き）

うーむ。
上手く書きたいことが書ければ良いんですけどね……
読み辛かったらすいませんね、ハイ。
読んでくれてありがとうございました。

とある店の、とある悩みの話／１（前書き）

波風立てぬ人生。
波瀾万丈な人生。
どちらが良いのかなんて分からない。
それはきっと、終わるときに自分が決めることだから。

とある店の、とある悩みの話／1

「なあ、カメ吉。なんで私は、こうも素っ気ない態度をとってしまうんだろうなあ」

ヴー、というエアポンプの音と、かけているクラシックとが奇妙な重奏のＢＧＭを作り出している。

田中は、それぐらいしか音のない店内に一人、店の端の方にある水槽の前でしゃがみ込んでいた。

コンコン、と水槽が軽く叩かれる。

「なあ、カメ吉……あ、カメ夫でもいいよ。聞いてくれるか？」

二匹はゆらゆらと水槽の中を泳ぐでもなく、ただ流されて浮かんでいるだけように見えた。

はあ、という溜息と共に、田中はぽつぽつと語り出す。

「……いいよな、流されるだけの勢いのある流れで。こっちはさ、ほとんど止まってるのと同じなんだ。上手に波に乗ろうとしても、乗れないんだよ」

誰に言うわけでもなく、ただ一人、自分の立場を確認するかのように口にされた言葉。

それに返事などあるはずもなく――。

「なら、自分で波を立たせりゃいいんじゃねえの？」

「うひゃっ」

――なんていう田中の思い込みは、突然ガラリと戸を開けて現れた恭介によって打ち消された。

ちなみに素っ頓狂な声をあげたのは田中である。

恭介はそのまま、入り口から田中の側――店の端の水槽の前に――まで歩いて行き、それを覗き込む。

田中は、恭介の行動の一挙動一挙動に驚き、……あるいは別の理由があったのかもしれないが、彼から目を離せないでいた。

「なあ後輩、俺は思うワケだ。流れや波なんてモノは言い訳で、

何も出来ない・出来なかった自分を美化してるだけだってな。
自分がしたいと思ったことをする。自分がいいなと思ったことをする。それが一番、筋が通ってる、ってな。
正しい、正しくないなんて二番目でいいんだよ。自分の意志ってのを尊重しねえと、ただでさえ短い人生、楽しく過ごせねえ」
静かに、だが確かな温かさの込められた声でそう恭介は語った。
田中は思う。きっと、こんな人だからこそ私は――。
そう思えたからこそ、彼女はいつも通りに素っ気なく、彼に接することにした。
「恭介さん、何一人で語っちゃってるんスか。ほら、早く着替えてきてくださいよ。今日も遅刻してるんですから」
時計を指さしながら、田中は言う。
それを聞いた恭介が焦った様子で言い返す。
「な……！後輩、そりゃねえよ！ありがたーいお説法、説いてやったじゃねえか！」
「知りません。一人、悦に入って語っちゃってただけじゃないですか。
ほら、急がないとバイト代減っていきますよー。
私、店長から恭介さんの見張りを頼まれてるんですから。
今日で遅刻が連続三回……っと。バッチリ店長に報告しておきますからね」
ニコッと微笑む田中。本人も意図せず零したその笑みには、どんな想いが込められていたのか。
対称的に、落胆する恭介。その肩が少し落ちていたのは、恐らく軽い絶望感が乗っかっていたからだろう。
読みやすい心と、読み辛(づら)い心。
なんともまあ、人の心とは全く度し難いモノである。
「しかし……」
きっとこの態度のままじゃあ、お互いの本心はきっと両方とも推し量れない。

「……やれやれ、見てて飽きないね。ホントに」
店長の呟きは、今日も二人が奏でる二重奏の中に消えてゆく。

とある店の、とある悩みの話／1（後書き）

田中は女の子です。
……分かってくれてるならいいんですけどね（笑）
友達が、「うっわ、ホモじゃん」とか言うから一応書いときます。

読んでくれてありがとうございました。
続きも読んでくれたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0768x/

とある店の話

2011年10月9日16時01分発行